
ヘタレの幻想入り

背以

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタレの幻想入り

【Nコード】

N9881N

【作者名】

背以

【あらすじ】

わけありな男が幻想入りし、生活をする。そして、幻想郷の住人達と心通わせていくって感じのハートフルストーリー（予定）

その1（前書き）

二次小説しか読んだことがない、小説書くの初めての初心者なので、キャラ崩壊など含まれます。
そういったことが大丈夫な方だけでどうぞ。

その1

今、僕の目に映るのは晴れ渡る空。

雲一つ無い、蒼い空。

（空を見るなんて何年ぶりだろう。間違いなく二年は見えていないな）

そんな事を思いながら、辺りを見渡す。

自分を取り囲むように向日葵が咲いていた。ここは向日葵畑なのだろう。

どうして僕はこんな所にいるのだろうか？

外に連れ出されたのだろうか？

そんな疑問が頭をよぎるが、まずは現在位置を確認しなければなら
ないだろう。

立ち上がり、人を探しに行こうとする。

だが、ふと下を見てみればいくらかの向日葵を踏みつけていたらしい。

向日葵は茎から折れてしまっている。

「仕方無いな」

命は大事にしなきゃいけないよな。あまりこれを使い過ぎるとい
けないとはわかっていても。

僕は集中し、手をかざす。

すると、向日葵は元に戻り、周りの向日葵以上の元気を取り戻して

いく。

「これでよし！」

「何が良いのかしら？」

うわっ！ 誰っ！？ …… って見られたのか！？

其処にはいつの間に近づいたのか、日傘をさしている、綺麗な女性
が立っていた。… 全く人の気配なんてしなかったのに。

とはいえ、どうにかして誤魔化さないと不味い！
せっかく自由を手に入れたんだ！

「え、え〜つと…。 向日葵に元気がなかったので… その… は、励ま
してました…」

… なんだこの言い訳。 もっと何かあるだろう！
頑張れよ、僕！

「… へえ。それがあなたの能力？ 励ます程度の能力とでも言え
いのかしら。 普通の人間にしか見えないけど」

… あれっ？ あんまり驚いてない。

ここは普通、化け物とか言われて怯えられるところなのに…。
てゆうか、この口ぶりだとこの人も何かしらの力を持っているのか？
… ま、まあいい！ とりあえずここがどこか聞こう！

「はい。 生命力を分け与えるって感じの力です。 それで… あの、こ
こはどこですか？」

「此処？…ああ。あなた外来人ね」

外来人？ 外来人ってなんのこと？

「ここは幻想郷。幻想郷の太陽の畑と言われている場所よ」
幻想郷？ 幻想郷って何？

「見たところ、来たばかりみたいね。あっちにある博霊神社に行きなさい」

そう言っただけで彼女は指を指す。

…いや、森しか見えないんだけど…。まあ話を続けてくれる感じでもないし、とりあえず行ってみるか。

「ありがとうございます。では行ってみますね」

僕を怖がらない人もいるんだなあと思いながらお礼の言葉を言い、歩き出そうとする。が、

「…ああ、覚えておきなさい。次、花を折ったら殺すわ。今回はその能力に免じて許してあげる」

という言葉に足が止まる。

まさか怖がるどころかここまで言ってくるなんて。言われたことはただの殺人予告だけど、

言葉のあけすけさにかなり嬉しくなった。だから、

「あの、僕、アマノミコト天乃尊って言います！あなたは？」

なんて言ってしまった。初めて仲良くなれる人が出来たと思ったから。

「…風見幽香よ」

「じゃあ風見さん、また来ます！」

すると風見さんは驚いた顔をし、

「死んでもいいのならいつでも来なさい」

と笑顔で言った。

だから僕も、

「はいっ！」

て笑顔で言っちゃった。

その2（前書き）

キャラの口調が掴めない。
完全な見切り発車。

その2

ただ今、森の中を移動中です。

方角は一応わかつているので良いんですが、どれほど遠いのかわかりません。

日が暮れるまでに着けば良いんですが…

…んっ？何か霧が出てきた。

不味いな。これでは迷ってしまう。

そうこうして歩いていっているうちに湖に着いた。

かなり肌寒いが、ここで少し休もう。

水もあることだし。

…この水大丈夫なのか？

10分ほど休み、ふと湖を見渡すと、小さな子がいるのがぼんやり見えた。

おおっ！人、発見！

博霊神社の場所を聞こう。

そんな思いをもって、話しかけようと近づいていくと…

「…っ誰!？」

どうやら驚かしてしまったらしい。

「僕は天乃尊。 きみは？」

「あたい？… あたいはチルノ！」

「じゃあチルノちゃん。 博霊神社って知ってる？」

どうやらこの子はチルノと言うらしい。

背中についている羽根のようなものはファッションなんだろうか？
外に出ない間に随分と前衛的なファッションが流行りだしたんだなあ。

「知ってる」

「場所を覚えてくれないかな？」

「… あたいを倒したら教えてあげる」

なんか倒さないと教えて貰えないらしい。
結構急いでるのに。

「何で勝負するの？」

「弾幕ごっこ！」

幻想郷に続いて意味不明な単語が出てきた。

「チルノちゃんって強いんだろう？」

「あたいはサイキョーよ！」

やっぱりか。勝負を相手にぶっかけるってことはそれだけ強いってこと。

しかも自分を最強と言うビックマウス。自分を追い込む精神の強さも持っているんだろう。

てゆうかこんな小さい子が最強って凄いな！

「僕、弾幕ごっこなんてやったことないし、チルノちゃんみたいな強い人には勝てないよ」

「ふふん。ならあたいの弟子にしてみてもいいわよ！」

…どうしよう。

って悩むことでもないか！

「よろしくね！師匠！」

この時のチルノちゃんは本当に嬉しそうだった。

おそらく、自分が生み出した最強の流派を受け継ぐ者が現れたことを喜んでいるのだろう。

こうして僕はチルノちゃんに無事弟子入りすることが出来た。

あれ？僕、何してたんだっけ？

その3（前書き）

主人公、泣く。

それでも貴様、日本男児か！

こんなもの儂は認めん！ぶるああああ！！

という方はご注意下さい

その3

あの後すぐに、自分が博霊神社に向かっていたことを思い出し、チルノちゃんに道を教えてもらって、ようやく博霊神社に着くことができた。

もうあたりは暗くなってきた。

真っ暗になる前に着くことができたということに安堵する。

しかし、油断することはできない。

なぜなら、博霊の巫女は、チルノちゃんに

「あたいでも苦戦する」

と言わせるほどの豪傑なのだ。

気をつけるに越したことはないだろう。

粗相のないようにしなければ！

一言で言えば取り越し苦労でした。

想像では、ゴリラみたいな子が出てくると思っていたのに…

すごく…可愛いです。

それに凄い優しいです。 もしかしたら、弹幕ごっこというのは僕

が考えているものよりも安全で、夏祭りの射的のような遊びなのかもしれません。

…夏祭りには行ったことないですが。

「出来た」

ようやく夕飯が完成しました。

そうです。僕が夕飯を作っていたのです。

事の始まりはこうです。

「そんなに怖い人なら何かお土産を持って行こう…。巫女さんって何が喜んでくれそう？」

「あたい、食べ物なら何でもいいと思う！」

こうしてチルノちゃんの意見を参考に、神社に行くまでの道のりで食べられそうなものを持ってきたのです。

さすがにこんなもの貰っても喜ばないかなあ？むしろ怒られるかもと思いましたが、喜んでもらえたようです。

そして、こうなりや料理もしちゃえということとで台所を借りていきます。

…普通、初対面の人を台所に上がらせるなんてことは出来ないと思

う。

こうした豪胆さが、最強のチルノちゃんに強敵とまで言わせる原動力になっているのに疑いの余地はないでしょう。

「霊夢、出来たよ」

「あら、美味しそうじゃない」

「いただきます」

そういえば、僕は霊夢ちゃんのことを霊夢と呼んでいる。

霊夢ちゃんが子供扱いされているみたいで気に入らないらしい。

「それで、霊夢。僕は外来人らしいんだけど、今僕がおかれている状況を説明して欲しい」

霊夢説明中…

「……っていうわけ」

霊夢の話聞いて、僕が一番最初に思った事。
それは…

「自由だー!!」

ってことである。

もうあそこに戻らなくていいと思うと涙まで出そうになる。

そして、僕の事を化け物として扱わない人達と暮らせることに嬉しくなる。

「ちよっ…！？ 何泣いてるの！？」

涙は出ていたらしい。

霊夢は、今までいた所に帰ることも出来ると言っているのに泣いている僕を見て焦っている。

「…ああ、ごめんごめん。これからはこんな優しい人達と一緒に過ごせるって思うといい」

そんな僕に、霊夢は呆れたような顔をして言う。

「しょうがないから少しの間泊めてあげる。その間に暮らせる所、見つけてよ」

その優しい言葉に嬉しくなった僕は、また泣いてしまうのだった。

その4

腋見せファッションは幻想郷の流行の最先端。
霊夢が言った言葉だ。

確かに昔テレビで、へそ出しが流行っていると聞いていた。
すると、腋見せが流行しているという情報に、一点の曇りもない
だろう。

また一つ、幻想郷の常識を知ることが出来た。

ちなみに今は、神社の周りの掃除を終え、霊夢とのんびり話をしている。

なんでも、人里に行くまでに妖怪に襲われる可能性があるので、
昼頃に此処に来るであろう人に連れて行ってもらえという話であり、
今はその人を待っているところなのだ。

「おい、霊夢！来たぜ」

恐らくその人が来たらしい。

「あれっ？そいつ誰？」

彼女、霧雨魔理沙は魔法使いらしい。
箒に乗って空を飛んだので間違いない。
魔法使いなんて初めて見たよ…
かなりテンション上がるな！

「凄いな、魔理沙！ 空飛べるのか！？」

「当然だぜ！ ミコトは飛べないのか？」

飛べるわけないだろ！ とは言わない。

「ああ。魔理沙、他に何かできるのか！？」

「ちょっと待ってな！」

そう言っていると魔理沙は何かを用意する。

何をするんだろうとワクワクしていると、

「よし、ミコト！ しっかり見とけよ！」

そう魔理沙が言った瞬間。

ビームが出ました。

極太のビームが。

「凄っ！ 凄すぎるぞ！ なんか凄い格好いいの出たぞ！？」

やばい。本当に格好いい！

僕もどうにかして飛んだり、ビームを撃つことはできないのだろうか？

そう思った僕は魔理沙に言った。

「魔理沙、僕に空の飛び方を教えてくれ！」

結論。僕は、魔理沙の方法では飛べない。

何でも魔力がないらしい。
…かなりシヨックだ。

「はいはい、落ち込まない。魔理沙、これから暇でしょ？ミコトを人里に連れて行ってくれない？」

「おいおい、暇って言い方はないだろ。まあそれくらいならお安い御用だせ」

どうやら人里に連れて行ってくれるらしい。

「それじゃ、早速行くか！ ミコト、後ろに乗れ」

それじゃ遠慮なく。

「すっかり掴まってるよ」 こうして初飛行を経験した僕は、目の前に広がる光景に言葉を失う。

そのあまりの自然の美しさに。

「…」

「どうしたんだ？」

「いや…なんでもないよ。それより、やっぱ魔法使って凄いな！こんなに感動したの初めてだ！」

「そうか？」

魔理沙は飛んだだけでこんなに誉められるのは初めてなのだろう。

こちらに顔を向け、照れながら笑っている。

「…そうだ！帰りはもっと凄い場所に連れて行ってやるぜ！」

それじゃあ早く住処を見つけないと行けないな。

こうして帰りも魔理沙に送ってもらうことが決まり、話しているうちに、僕達は人里に到着した。

その5

- 人里 -

物珍しそうに見られています。

まあ僕は外来人で、さらに変な服装をしているという事で、注目しているのでしょう。

今までは話に出てきませんでしたが、僕は術前術後衣を着ています。術前術後衣というのは、健康診断の人や手術を受ける患者さんが着る服です。

そうです。照る照る坊主みたいな格好になるアレです。

正確には、甚平タイプなのですが。

さらに、靴は履いていません。何故かスリッパです。

…幻想郷に来る直前は裸足だったような気がするのですが…

ですから、注目されるのは当然として、ちょっと恥ずかしいです。

ですが、ここで挫けてもいられません。
早く、住処を見つければ！

「あの、すいません」

「…？　どうかしましたか？」

人に声をかける事に成功しました。

優しいような人を選んだおかげか、しっかり話を聞いてくれそうです。

「昨日、幻想郷に来たばかりの外来人なのですが、ここで暮らそう
思っているの、空き家などがないかと思ひまして」

「そうか。ならば、私についてくるといい。案内しよう」

どうやら空き家のある所まで案内してくれるらしい。
なんて優しい人なんだ…！

女性に連れられて僕は歩く。

そういえば、魔理沙とは別行動をとっている。
何か行きたい所があるらしい。

「あの、僕は天乃尊って言います。お名前伺ってもよろしいですか
？」

後でお礼に行かなくてはいけません！

「私か？　私は上白沢慧音だ。慧音で構わない。それから、そんな
にかしこまらなくていいぞ？」

「それじゃあ、慧音さん。慧音さんはどんな仕事をしてるんですか？」

「私は向こうにある寺子屋の先生をしている。」

…幻想郷にも学校はあるらしい。

「おっと。ここだ。」

慧音さんが指した方を見れば…

…完全に廃墟です。こんな所に住めるのでしょうか？

呆然と突っ立っている僕を見て、慧音さんは慌てる。

「い、いや、見た目は悪いが造りはしっかりしているし、掃除すれば綺麗になるっ！」

いかん。どうやら慧音さんを困らせてしまったようだ。

「ありがとうございます！ 此処に住むことにします！」

だから、自分に出来る精一杯の笑顔でこう言った。すると、

「そうか。それなら良かった。何か困ったことがあったら、私に相談しに来るといい。」

と、ほっとした顔でそう言ってくれた。

その後、慧音さんと別れ、僕は家を掃除していた。

掃除道具は持って来ていないので、家具の整理くらいだけど。

もうそろそろ日没なので、約束の場所に行こう。

「おい！ 魔理沙！」

「ミコト！ 家は決まったのか？」

「ああ。結構良い家だよ。今度、魔理沙も来てよ。」

「わかったぜ！ それじゃあ行くか！」

こうして僕の住処は決まり、行きに話に挙げた凄い所である、
紅魔館の図書館に行くことになったのである。

その6 上

僕は今、すさまじく大きな図書館にいます。

そして、その図書館でパチュリーちゃん、フランちゃん、魔理沙と談笑しています。

此処に来るまでに様々な事が起こりました。

そのせいで、体はボロボロです。

…本当に疲れた…。

「……ねえ！ 聞いてる？」

「ああ、ごめん。何だったっけ」

「もう…」

いかんいかん。ボーっとしていたらしい。パチュリーちゃんが怒っている。

「あなたの能力についての話よ」

- 数時間前 -

「あれが紅魔館…」

遠くに赤い建物が見える。

魔理沙はあそこに僕を連れて行こうとしているらしい。

「本当に門から入らなくていいの？」「大丈夫だぜ！」

なんでも、魔理沙はこの図書館によく来るので、門から入らずともいいのだとか。

…まあ僕は初めてなわけだし、挨拶はしておかなくては。

「それじゃ一旦僕を門の前で降ろしてくれない？」

「なんでだ？」

「いや、とりあえず僕だけでも挨拶したほうがいいと思って」

「必要無いぜ！」

そう言つて魔理沙が指した方を見れば、門番が寝ているのが見えた。

確かに起こしてまで挨拶するっていうのは気がひけるな…

「まあいいか…。お邪魔します！」

こうして僕達は門を素通りすることにした。

誰かの悲鳴が聞こえたような気がしたが、たぶん気のせいだろ

う。

・紅魔館内・

こうして僕達は紅魔館に侵入したんだけど…。

真っ赤です。壁が。

最近家を一色で統一するのが流行りなんだろうか？

そんなことも知らないとはれないように、しっかり記憶しておきます。

「どうしたんだ？」

魔理沙が、眉間に皺を寄せて考え込んでいる僕を見て、心配そうにしている。

「い、いや…トイレどこかなって。」

上手い言い訳が言えました。

出来るじゃないか！僕！

「そんな事が。トイレなら向こうにあるぜ」

魔理沙は、安堵した顔で言う。

「ありがと。図書館は真っ直ぐ行けばつくんだよね？」

「そうだぜ？」

「じゃあ先に行って。僕もすぐ行くから」

廊下で待ってもらうのも気がひけるので先に行ってもらおう。

「…わかった。早く来るんだぜ？」

魔理沙が行くのを見てから、僕もトイレに向かう。

特に出る気配はないが、トイレは行ける時に行っておこう。

…確かこつちだったよな？

やってしまいました。

完全に迷子です。

トイレに行って迷子とか恥ずかしすぎる。

…あつ！ あそこに人が！ あの子に聞く事にしよう。

「ごめん。ちょっと聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「あなた、誰？」

近付いて見て気づいたが、この子も背中に羽をつけている。

流石です。師匠。まさか最強であり、尚且つ、ファッションリ
ーダーでもあるとは！

「僕は天乃尊。魔理沙に連れられて此処に来たんだ。君の名前は？」

「…フラン。フランドール・スカーレット」

「フランちゃんか。フランちゃん、図書館の場所って知らない？」

「知ってる。…そんな事よりも弾幕ごっこしない？」

またこの流れです。

幻想郷では子供達にどんな教育を行っているのでしょうか？
慧音さんに注意しておきましょう。

「僕は幻想郷に来たばかりで、弾幕ごっこを良く知らないんだ…」
こう言うておけばフランちゃんも無理強いはしてこないだろう。

「じゃあ練習しましょ！ 禁忌【レーヴァテイン】」

はっ？ …えっ…？

気づいた時にはもう左腕はなかった。
断面から血が吹き出ている。

あまりの痛みに気が狂いそうになる。

「……………っ！」

声が出ない。

息が苦しい。

「あははっ！次はあなたの番だよ！」

…これが、弾幕ごっこか。

まさかこれほどまでに過酷な遊びだとは…

僕は自分の認識の甘さを呪った。

くそっ…！ 使っしかない！

僕は能力を使う。

すると左腕は一瞬にして治る。

と、いうよりかは、はえる。

…フランちゃんは律儀にも待ってくれている。 恐らく、これはフランちゃんにとってはただの練習で、次は僕が攻撃をしてこいということなのだろう。

……弾幕の張り方を知りません…。

これは泣ける…。

（続く）

その6 下

困った。

非常に危機的状況です。

このまま行くと、確実に死にます。

「あははっ！ どうしたの？ あなたの番だよ！？」

…無理です。勝てそうにありません！

あと、あんな小さな子に攻撃なんて出来ません！

ここはやはり話し合いで決着をつけるべきでしょう。

命懸けの交渉が今、始まる…！

ゆっくり… ゆっくり…

そう、慎重に。

僕はなるべくフランちゃんに刺激を与えないよう、ゆっくり近付いて行く。

「フランちゃん。僕は弱くて、弾幕が張れないんだ。だから別の遊びにしよう？」

「うふふっ。それならただの殺し合いにしましょ！？」

…めげそうです。
誰が変わってください。

それからフランちゃん！ もっと人の話聞こうよ！

慧音さんめ！ 慧音さんは子供たちを戦闘民族にしようとしているのか！？

「弱いから無理だよ。」

「でも、弾幕が当たっても大丈夫だったじゃない！」

フランちゃんは何故か興奮状態です。

まあ、わからなくてもありません。弾け飛んだ腕が再生したのですから。

おっと…もうすぐで射程圏内…。

「フランちゃん…！」

今だっ！

大声で呼び、注意を引きつけ、足に能力を使い一気に距離を詰める。

さらに、高速で回り込み、僕はフランちゃんを思いっきり抱きしめた。

「えっ…！ あれっ！？」

フランちゃんは突然目の前から消え、現れたかと思えば抱きしめられている状況に驚き、困惑している。

「戦いたくない！ フランちゃんと、もっとお話したいんだ！」

僕のありったけの思いを込めて叫ぶ。

これでダメだったら、潔く死ぬしかないだろう。

僕は、さながら、判決を待つ被告人のように、緊張しながら運命の時を待つ。

「…弾幕ごっこしてから、お話じゃ…ダメ？」

「僕は弱いから、すぐ死んじゃうんだよ。だから、無理なんだ。そのぶん、フランちゃんと沢山話したい！ フランちゃんのことをいっぱい聞かせてほしいんだ！」

ここまで来たら勢いだ！

考える暇を与えたらまた弾幕ごっこという名の処刑だ！

「……う、うん。じ、じゃあ、お話しよう…?」

届いた…！僕の思いは届いたようだ！

フランちゃんは弾幕ごっこが途中で終わったことに不満があるのか、ずっと俯いたままである。
少し顔が赤い。

…もしかして抱きしめたことを怒っているのだろうか？
まずいぞ、また弾幕ごっこが始まったら間違いなく死ぬ。

ここは勢いで乗り切ろう！

「じゃあ、まず図書館に行こう！」

「…そ、そうね！」

こうして僕はボロボロになりながらも、図書館にたどり着くことが出来たのである。

余談だが、今の僕は左肩から先の服がないので、半腋見せファッションになっていた。

流行の最先端をいっていますが、若干恥ずかしいです。

その7

生命力を分け与える力。

僕がまだ、小学校に入学するよりも前に得た力。

僕はこの力のせいで、たくさんの辛い思いをしてきた。
こんな力、無ければ良かったなんて思うこともあった。

…だけど今は感謝している。

こんなに楽しい時を過ごせるのは、きっと、この力のおかげだと思うから。

「生命力を分け与える程度の能力、ね…」

パチュリーちゃんが何やら考え込んでいる。

「フランとの弾幕ごっこの話を聞くと、他のモノだけじゃなく、自分の体の一部にも使うことが出来るのね？」

「ああ。自分の生命力を削って、怪我をした部分に分け与えて、活性化させるって感じかな。」

「生命力を削るって…大丈夫なのか？」

魔理沙が心配そうな顔をして聞いてくる。

「うん。心配いらないよ」

心配はかけさせたくないの、安心させるように言う。

それにしても、と話をしながら、図書館内を見回す。

かなり広い。

一体どれだけの本があるのでしょいか？

図書館に入ったときに、思わず、

「広っ！ 本棚高すぎだろっ！？」

と、言ってしまった。

僕の言葉を聞き、魔理沙が得意気な顔でどんな本があるか自慢していたのが印象的である。

何でも、此処にある本は全て、パチュリーちゃんと魔理沙のものらしいです。

パチュリーちゃんは否定していましたが。

この出来事から、僕はパチュリーちゃんに対し、謙虚で優しい子という印象を持った。

2人で共有する図書館を、すべて魔理沙の物として、魔理沙に花を持たせようとしていたのでしょう。

だから、僕はパチュリーちゃんを安心させようと、

「わかってるよ」

と言うと、とても安心していました。

フランちゃんは、談笑し始めてからずっとニコニコしています。
…癒やされます。

「あなたの能力で、私の喘息を治せない？」

喘息か…。

外傷はともかく、そういった持病のたぐいは難しいな…。
そもそも、僕は喘息のことを良く知らない。下手な事をすれば、症状が悪化する可能性がある。

でも、基本的なことなら、やってみる価値はあるかもしれない。

「じゃあ失礼して」

パチュリーちゃんの背中に触る。
触らなくても与えることは出来るけど、効率と正確性に欠けるのだ。

確か、喘息は気管支の炎症が慢性化してなるものだった筈。まずは気管支を通常の状態に戻さなければならぬ。

僕は一気に力を込める。

僕は、時間をかけて能力を使うことが出来ないから。

…よし。身体の中の事なので、治ったかどうかはわからないけど、大分良くなった筈です。

「パチュリーちゃん、終わったよ。体の調子はどう？」

「…ちゃん付けは止めて頂戴。そうね…、楽になったような気はするわ」

「念のため、お医者様に診て貰ったほうがいいよ」

「そうね。そうするわ」

あれから結構話し込んでしまった。

パチュリーちゃん…、じゃなかった。パチュリーは、種族としての魔法使いで寿命が長く、僕よりもはるかに年上だということや、フランチちゃんは吸血鬼で、彼女もまた、僕よりも年を重ねているとい

うことを聞いたときには、自分の耳を疑った。

どう見ても幼女…失礼。小さな女の子なのだ。

今更さん付けなんて出来ないし、フランさんとか違和感ありすぎである。

よって、今までどうりフランちゃんと呼ぶことにした。

また、フランちゃんは全くと言っていいほど、外に出たことがないことも知った。

…フランちゃんは寺子屋に行ってなかったのか。

慧音さん、すいません。慧音さんは無罪でした。

楽しかったので時間がたつのもはやく、もう夜遅い。
さすがに帰らないと迷惑だろう。

「それじゃ、そろそろ帰るよ」

「そう…」

「えゝ!? もっとお話ししようよ!？」

パチュリーは表情が読みとれないが、フランちゃんはとても残念そうにしている。

というより、服を掴んで、帰らせまいとしていた。

可愛らしい行動だけど、力がやばい。

右の袖まで破かれてしまったら、僕も晴れて腋ファッションの仲間入りだ。

「また来るぜ！」

「そうだよ、フランちゃん。また来るから、その時は遊ぼう！」

「…うん！ 約束ね！」

フランちゃんは外に出られないという。きっと、友達が帰るのが寂しいのだろう。

だから、僕は安心させようと頭を撫で、すぐに来ると約束して帰った。

夜遅くまで帰って来なかったことについて、霊夢に怒られることを僕はまだ知らない。

番外 1

- - 風見幽香 - - -

私の畑に入った時点で、本当は殺すつもりだった。

近付いて花を見るだけなら、脅して、今後は二度と近づかないようにしようと考えていた。

しかし、あの男は畑に踏み入り、あまつさえ花を傷つけたのだ。当たり前の話だ。

花の命の代償は、その命で償って貰わなければならない。

だが、私はあの男を見逃した。
彼は自分の力をこう言っていた。

『生命力を分け与える力』と。

つまり、彼は花の命の代償をしっかりと自分の命で支払ったのだろう。

それならば、私が彼を殺す必要も感じない。

だが、警告はしておかなければならないだろう。
そう思い、私は殺気をこめつつ彼を脅す。

だが、私の言葉に対する反応は意外なものだった。

彼は自己紹介をした後、また此処に來ると言うのだ。

これに私は驚いた。

何故なら、かなりの殺気を出していたからだ。

普通の人間なら、腰を抜かすどころか、氣絶してもおかしくない。

だからこの時、私は多少動揺していたのだろう。

彼のまた來るといふ言葉に、死んでもいいのなら、としか答えられなかったのは。

どうせもう來ないだろうとは思つ。

しかし、もし來たら。

彼はその命で、どんな奇跡を起こすのか。

少し楽しみにしている私がいる。

- - チルノ - - -

あたいに初めての弟子が出来た。

ミコトっていう人間だ。

ミコトは弱いらしい。

まずはカエルと戦うところから初めさせよう。

- - 博麗霊夢 - - -

第一印象は、とにかく変なやつ、だった。

なにせ、最初の言葉が

「すみません。博麗神社の巫女様はいますか？」

である。

…この人は、目が見えないのだろうか？
格好からして、どう見ても私だろう。

それに巫女様って。

何故、様付けなのだろうか？

そういった疑問はあったが、一応自己紹介をして、自分が博麗霊夢で、此処の巫女だと言うと物凄く驚いていた。

どんな想像をされていたのだろうか。

…結構気になる。

でも、まあそんな事は後で聞けばいい。

見たところ、こいつは外来人。

幻想郷についてや、帰るまでについて説明してやらなければならない。
い。

…正直、めんどくさい。

誰よ！ ミコトのことを変な奴とか言つた馬鹿は！

めんどくさいって言つてた？ そんなわけないじゃない！

まさか、ごはんを持って来てくれているとは…やるわね！（キ
リッ

それにしても、と霊夢は考える。

ミコトの言動を見る限り、ミコトには辛い過去があるんだろう。

幻想郷で楽しく暮らして欲しいと、魔理沙とはしゃぐ姿を見て思う。

ミコトには家が見つかるまでの数日なら泊めると言ったが、食事さえ用意して貰えれば、いつでも泊めてやるつもりだ。

まあ、そんなことは、口にはださないけれど。

今から人里に行けば、夕方頃には帰ってくるだろう。

…キノコでも採ってくるか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9881n/>

ヘタレの幻想入り

2010年10月18日07時57分発行